

特集

ドラマ

黒田絵美子 ▶ **【巻頭言】** ドラマ

井上堯之 ▶ ドラマなる富良野塾

上田 信 ▶ ドラマ化される史跡

児嶋一男 ▶ アイルランドらしさのあるドラマ

黒田敏康 ▶ ドラマの発掘

大町和也 ▶ ニュースなドラマ、ドラマなニュース

畑佐一味 ▶ 日本語教育、柳家さん喬、そして、私

太田 茂 ▶ ある検事の覚え書

柳家さん喬 ▶ 嘶家の戯言

連載

「今日も劇場へ？」⁽¹²⁾

もっと！HIV／エイズについて知ろう⁽¹¹⁾

イチロー／キムタク

平成タレントロジック・序説⁽¹⁰⁾

映像を哲学する⁽⁵⁾

日本語教育、柳家さん喬、 そして、私

畑佐
Hatasa Kazumi
一味

私の専門分野は日本語教育で、在米生活が三十年になる。現在はインディアナ州立パデュー大学に勤務する傍ら、夏の間の九週間はバーモント州にあるミドルベリー大学が主催する外国語学校群の一つの日本語学校で校長を務めている。この学校での活動を通じて、落語家柳家さん喬師と出会い、落語、日本語教育、そして日本文化教育について考えるようになった。以下に、私の辿ってきた歴史を簡単に振り返り、今日に至った経過を述べる。

米国留学と日本語教育

一九七九年に初めて渡米した。いわゆる語学留学で、たいした目的意識を持っていたわけではない。したがって、その

後三十年間の大部分を米国で過ごすことになるとは全く想像していなかった。

一九八〇年代前半は英語の勉強が面白くなり、卒業後の仕事として英語を教えることを考えるようになっていた時期であった。しかし、イリノイ大学で英語教育（TESOL）の修士課程をやっていた時に、同大学の日本語科の教授であった牧野成一教授を通して日本語教育という分野に巡り合った。当時、牧野教授はバーモント州にあるミドルベリー大学夏期外国語学校群の日本語学校の校長を兼任なさっており、たまにたま教授から、偶然できてしまった空きを埋めるために、日本語学校で教える機会を頂戴した。この夏期学校は米国の外国語教育の老舗で、日本語学校は一九六九年に開校され、多

くの日本を専門とする米人研究者たちが日本語を勉強するために参加して来た(一番古い学校はフランス語学校とドイツ語学校で約百年前に開校している)。

一九八三年の夏に初級のクラスを担当するチームの新米教師として、初めて日本語を教える経験をした。この学校はトータル・イマージョンのシステムを採用していて、学生は九週間の生活を日本語だけで通さなければならぬ。もちろん学生同士も日本語を使わなければならない。教師も学生たちと衣食住をともにして、午前中は授業、午後からは各種文化活動、そして、週末は学校行事と忙しい九週間を過ごす。

仕事はきつい、学習動機が高い学生との毎日の授業と生活を通して、彼らの上達を肌身で感じることができ、教師冥利につきる魅力を持っている。現在この大学では夏の間同様の外国語プログラムがフランス語、ドイツ語、アラビア語、中国語など十校同時に開催されている。ミドルベリーでの初めての夏の経験は私にとって圧倒的なものだった。この九週間はその後私の仕事そして人生に決定的なインパクトを与え、その結果として私は「米国で日本語を教える」ことを自分のキャリアとして選択した。

イリノイ大学の教育学部の博士課程に進み、一九八九年に教育心理学のPh.D.を取得後、隣接するインディアナ州にある州立パデュー大学に日本語のプログラムを設立するための

教員として雇われた。当時、日本はちょうどバブル期で、米国でも日本語学習者が増加していた時代で、米国内の大学でも日本語のプログラムが設立されていた。だから、私もバブルの恩恵を受けたと言える。それから、二十年の月日を経て、現在もパデュー大学の教授職を務めている。専門分野は外国語教育における先端テクノロジーの利用で、コンピュータやインターネットをどのように日本語教育で利用するかに興味を持って、研究をしてきた。

落語との出会い

落語との出会いは一九七〇年代、私が高校生の時にさかのぼる。テレビで古今亭志ん朝師の「素人鯉(鯉屋)」を聞いた時である。この話は、金のない酒好きの男が、友達の男にただ酒を飲ませてやると言われ、浅草周辺を連れ回されるといふ展開から始まり、最後は鯉屋でただ酒を飲もうとする話である。この話を初めて聞いた時、浅草のすぐ隣の根岸という所で育った私には冒頭の二人が歩き回っている場所が、まるで自分もくっついて歩いているかのように、一つ一つ手に取るようにわかってしまった。志ん朝師匠の話芸もさることながら、自分の生い立ちが与えてくれた土地勘は、とても心地よく、普通の人にはとつきにくいであろう古典落語がとても身近に感じられた。そして、この後テレビとラジオで古

典落語を聞きまくった。しかし、スポーツの部活に傾倒していたその頃は、寄席に通うということはなかったし、落研に興味を持つこともなかった。その後も落語は趣味として聞き続けていた。この時の落語との出会いが、後に仕事に直接結びついていくことになるうとは、この時は知る由もない。

ミドルベリー大学日本語学校長と落語

ミドルベリー大学夏期日本語学校では、一九八〇年代を通して四回ほど教える機会をもらった。しかし、牧野先生が校長職を辞してから、ミドルベリーに戻る機会には恵まれず、しばらく足が遠ざかっていた。そんな時、二〇〇五年に校長職が公募され、後任に選ばれ着任した。以来夏の九週間をバーモント州で過ごす生活が続いている。初めて日本語の教員として仕事をしたミドルベリー大学に校長として戻ってくることになるというのは、感慨深いものがあったのと同時に、縁の強さを感じた。

日本語学校は具体的には語学力を伸ばすことが目標であるが、私はこの学校の大きな目標として、より多くの知日家を育成したいと考えている。もちろん、親日家になってくれれば嬉しいが、それは本人が決めることである。私たちができることは日本に対する正しい知識を持った外国人を育てることである。

校長の仕事は約百名の学生を教える二十五名ほどの講師陣を雇って、九週間の学校活動をデザインし、実施することである。授業自体は講師陣に任せるので、私は学校行事と学校全体の雰囲気をよくし、良好な学習環境を維持することに集中できる。日本国内で行われる夏のプログラムに参加するという選択肢を持っている学生たちをわざわざバーモント州の夏期プログラムに参加させるためには、カリキュラムの差別化を図り、学生の学習動機を向上させるよう日本のプログラムでは実現できない要素も組み込んでいく必要がある。

現在、米国での日本語学習者の多くはマンガ、アニメ、ゲームを学習動機に挙げる。これはロジャー・バルバース氏が言うM A S K (Manga, Anime, Sushi, Karaoke) 現象の現れと言えるであろう。マンガ、アニメに対する興味をすでに持っている学生たちの文化理解をさらに深めるために、違うタイプの文化を紹介することを考えた。そのような文脈の中で、私自身が子供の時から親近感を持っていた「落語」を日本語学校で紹介することはできないかと考え始め知人を通して、柳家さん喬師を紹介してもらった。落語を選んだ理由は以下の通りである。

- ① 基本的に話芸であるため日本語教育/学習にとっても近い。
- ② 笑いというユニバーサルな要素が含まれている。
- ③ 一人芸であるため、費用を少なく抑えさせることができる。

④ 歌舞伎や文楽ほど日本の伝統文化として取り上げられていない。

この時、紹介していただいた落語家さんがさん喬師であったことは、この後の活動にとって大きな意味を持つことになり、私は大変な幸運に恵まれた。さん喬師は現在名実共に東京の落語界の牽引車であり、大看板である。その話芸には定評があり、特に人情話は評価が高い。さん喬師はご自身の師匠（五代目柳家小さん）への恩返しのためにとおっしゃっているが、とにかくなるべくたくさんの人に斬を聞いてもらいたいとの思いから、アメリカバーモント州の田舎に来て、そこで日本語を学習している学生相手に落語を紹介するという活動への招待を快く引き受けて下さった。そして、一人では寂しいからということで、二番弟子の柳亭左龍師と紙切りの林家二楽師にも同行を依頼し、二〇〇六年の夏にプロの芸人三名が日本語学校に来て十日間一緒に生活しながら、各クラスを訪れ落語や紙切りのデモをして、最後にはプロ三人による本格的な落語会が実現した。

一流の芸を見るということ

学生たちは落語に関する知識をほとんど持っていなかった。師匠一行がミドルベリーに到着したすぐ後、さん喬師が一席やりたいとおっしゃった。そのような予定はしていなかった

紙切りを初めて見るということ

紙切りを生まれて初めて見る学生たちは、まるで、奇跡を見たような反応をする。一枚の紙に、下書きもせず、いきなり罫を入れて、ほんの数分間のうちに素晴らしい作品ができてしまう。学生たちは、始めは「どうなるのかなあ」という半信半疑の目で見ているのだが、途中で「あれ、馬みたいに見える」といったように何かに気づく。そのあたりで、「えーっ、すげえ！」というような声が聞こえ始める。二楽師ご本人も「日本人のお客さんは初めて紙切りを見ても、ミドルベリーの学生のように素直に喜ぶということはしないので、とても新鮮です」と感想を述べておられた。これは私にとってもとても喜ばしいことである。

「紙切り」という芸は「切り紙」と違って、日本固有のものである。お題をもらって、数分間で切り上げるといってパフォーマンスは、他のアジアの国にも見られない。いずれ是非全米各地で紙切りツアーを敢行してもらいたいものである。二〇〇六年の落語週間のフィナーレは落語会であった。舞台上に高座を作ることもしたことがなければ、マイクやライトの感じもわからない、客席は明るくしておくという奇席の伝統も知らない。そんな初めてづくしの状況ではあったが、大学の劇場スタッフと話し合いながら、出演者も一緒になって

ので「ちよつと無理です」と答えたが、さん喬師の気持ちは変わらない。そこで、ラウンジにあったテーブルの上に、ソファのクッションの一つをのせて座布団代わりにすることになった。始めは、簡単なご挨拶や米国に来た経緯などから話すが、一旦本編に入ると声も声の大きさも一転し、聞いている者を落語の世界に引きずり込んでいく。集まった学生は初めて見る落語という芸を間近にして、よく笑った（後日、さん喬師はこの日の「時そば」で学生さんが笑ってくれたので、この先一週間は大丈夫だと安心したとおっしゃっていた。名人さん喬師も不安であったのである）。一流の落語家の芸を目の当たりにした学生たちが「これはすごい」という感覚を持ったことがよくわかった。それと同時に、私は学生に一流のものに触れさせることの重要さを痛感した。初めてであっても、学生たちは本物がわかる。その意味で、さん喬師と左龍師が見せてくれる磨き上げられた芸のレベルの高さは学生たちを感動させる。落語週間に対する学生の評価はこれまで毎年満点である（余談ではあるが、この時日本語の教員たちの半数以上も初めて生の落語を見るという経験をして、その芸に感動していた。さん喬師の「時そば」が生涯初めて聞く落語で、しかもそれをプライベートな場で聞けるといのは大変贅沢なことである）。

高座を作り上げた。この手作り落語会は幸い大成功で、大きな満足感を持って終了した（おかげで、アメリカのどこでも、落語会を開ける自信がいった）。

この年の落語家さんたちと一緒に過ごした十日間は記憶に深く残る十日間になった。それは、私自身が暗中模索で、滞在しているプロの芸人さんたちに何をしてもらえば一番効果的なのかがわからないまま、ただ闇雲に走り回っていたあつという間の十日間であった。この時、お迎えしたのがさん喬師で本当によかったと思った。さん喬師の人柄があったればこそ、不慣れな我々の活動に、文句を一言も言わず快くお付き合いただけたのだと思う。パーリントン空港から日本へお帰りになる時に一行を見送りながら感じた感謝の気持ちはこれからも忘れることはない。

学生に小咄をさせるということ

二〇〇六年の成功を受けて、翌年も同様の活動を行うことに決めた。さん喬師と左龍師は翌年の仕事も引き受けて下さった。今度は落語を見るだけでなく、実際に体験する活動に変えてみようと思ひ、学生に小咄を練習させて、その発表会もかねて、落語会の前座として、高座に上げてみることにした。それで、二〇〇七年のセッションでは課外活動の一部として落語クラブを作り、カリキュラムの中に組み込んだ。

落語クラブに参加した学生たちには、まずインターネットの小咄サイトをいくつか紹介し、自分で好きな話を選んで来るように指示した。小咄といってもごく短いものではんの二行ほどのものもある(例を参照)。学生たちは自分たちの日本語のレベルに合わせて、いろいろな話を選んで来た。

▼小咄の例

患者 先生、私、手術するの初めてなんです、大丈夫でしょうか。

医者 大丈夫ですよ、私も初めてですから。

次に、その話をまず暗記し、師匠方が来校されるまでに滑らかに言えるようになっていくことを目標として繰り返し練習させた。一週間後、師匠方が到着され、プロを前にした練習が始まった。師匠方は丁寧に目線のことや、仕草について指導してくれた。学生たちも始めは緊張していたが、少しずつ慣れて来て、声が出るようになっていった。さらに、学生たちは話の練習をしながら、座布団に上手に正座をする仕方、自分の出番が終わった後には座布団を返すこと、そして座布団には正面があることなどを体験していく。

少しずつ話に自信が出て来た学生たちの姿勢が変わったのは本番前日の会場でのドレスリハーサルを行った時だった。

それまで、まだまだ恥ずかしさが抜けきれなかった学生たちが本番が近くなったことを感じたことで、心の中に「笑いを取りたい」「受けたい」という気持ちが芽生えて来たようだった。彼らから師匠方への質問にはつきりとした質的な変化が見られた。例えば以下のような質問があった。

「師匠、ここはこういう風に言ったらどうでしょうか」

「ここはもう少しゆっくり話した方が面白いでしょうか」

「こっちの言葉の方がいいでしょうか」

私は学生たちのこのような質問を耳にした時、今回の試みは成功したと確信した。

本番当日。出番の前、浴衣を着せてもらった学生たちは舞台の袖に並び、順番を待っている。みんな、緊張している。忘れてしまわないように、自分の話を繰り返し、つぶやいている者もいる。私は舞台で頭が真っ白になって恥ずかしい思いをする学生が出ないことだけを願っている。いよいよ本番が始まる。さん喬師も心配して、学生の脇について、舞台に出る行く学生たち一人一人に声をかけ、背中を押して送り出していく。全員、無事終了。あとは、プロの出番なので、こちらもほっとする(この時、さん喬師がおっしゃったことが記憶に残った。「先生、舞台の袖でこうして緊張しているのはプロもアマもありません。私たちもそうですよ。とても新鮮です」)。

落語会が終わった後は、学生たちも達成感を味わっていた。人前で話すのが怖くなくなったという感想をくれた学生もいた。外国語学習者は常に言語弱者である。これは留学した時に強く感じる。「私の日本語はまだまだ上手じゃない」という観念からなかなか離れることはできないし、生活をしていて、言葉が理解してもらえないことも頻繁に起こる(私自身、米国で三十年生活しているわけで、現在でも言語弱者である。特に、街のK-MartやWal-Martに行くと買い物をする時などには、「やっぱり英語の母語話者ではないんだなあ」と感じさせられる)。このような言語弱者である学習者が外国語で冗談話をして、母語話者に「すごい」と思わせるのは、学習者にとつて痛快であり、自信を植え付けることができる。だから、客席に普段は教室にいない人がいてその人たちに向けて発表する場を設けることは、教育的に意味がある。

二〇〇七年の小咄活動の成功を発端に、この活動はその後も継続され、二〇一〇年には四度目の小咄活動が行われる。また、二〇〇九年十二月にはお茶の水女子大で同大学に留学している外国人学生に小咄活動をしてもらい、小咄発表会兼プロの落語会による落語会を開催した。現在は、はくほう児童教育振興会のご支援で、小咄活動を落語に詳しくない日本語教師でも行えるように支援するためのインターネットのサイトを構築している。<http://tell.fll.purdue.edu/hatasa/rakugo/>

rakugobystudents.html

一連の活動を通して

私の本業は日本語教育である。五年前に偶然さん喬師と出会い、日本語教育に落語を取り入れ始めた。始めは、伝統芸能として鑑賞するための落語であったが、その後、小咄を演じることで体験できる文化に変化させることができた。そして、小咄を演じることは、単に言葉や発音を練習するだけではない。この活動を通して文化理解を深めることができたり、日本人を驚かせたりすることができる。そして、落語という芸能形体を日本人以外の人たちに知ってもらうことができる。

ここ五年間の活動は種蒔きのようなものである。そして、最近蒔いた種の芽が始めている。日本に留学している学生たちの中で自ら客席に行ってみたというメールが時々届くようになった。将来、客席に出ている落語家さんたちに「このごろ外国人のお客さんが来ているねえ」と気がついてもらえるようになったら、素晴らしいことである。また、ミドルベリィでの活動を基にして、ミシガン州のイースタンミシガン大学の先生が小咄活動を実施し、成功したとの報告を受けている。

現在、世界中にいる日本語学習者を対象に小咄を落語形式

で語っているビデオを投稿してもらって「日本語学習者による小咄投稿コンテスト」を行いたいと計画している。

最後に、ここで述べた一連の落語と日本語教育に関する活動はさん喬師の人柄なくしてはなしえないことであった。今後とも師と一緒に活動を末永く続けていきたいと思っている。

エピソード余談

▼ミニマリスタの落語

「ストーリーを楽しむ」ための様々なメディアを「視覚的具象性」という一つの連続線に配置すると、一端は映画で、もう一端は文学だと言えるだろう。現在の映画は「アバター」に代表されるようにVFXを駆使し、さらに3D化され、観衆にあたかも実体験かのような錯覚を与えるように進化して来た。一方、文学はすべての情報は文字を通して供給され、視覚的な刺激は一切ない。すべてのイメージは読者の頭の中で展開される。脳科学的には脳内の認知活動は違うであろうが、人間はどちらのメディアからも感動を受けることができる。舞台劇、文楽、パントマイム、人形劇、ラジオ劇、朗読などのメディアは視覚的具象性の度合いによってこの連続線上のどこかに置くことができる。落語は一人芝居で衣装も大道具もない、小道具は扇子と手拭いだけで、立って歩き回ることもできないという意味でミニマリスタ的である。落

と笑えるのに、自分がやると笑えないことに、すぐ気がつく。そして同じ言葉で話しているのに何が違うのかを考え始める。実は、これは古典落語の聞き方を身を以て体験しているのである。

▼落語と字幕のこと

日本語学校に参加している百名の学生のうち、およそ半数が日本語学習歴が二年未満である。彼らには落語の基本的なストーリー展開を理解することは無理である。そこで、落語会で演じる演題のためにパワーポイントで英語字幕を作り、下級生でも落語の面白さが理解できるようにした。

二〇〇七年の落語会ではさん喬師に「死神」を演じていただけをお願いした。「死神」は滑稽話ではなく、怖い話である。この話を選んだのは学生たちに落語の幅の広さを知ってもらいたかったからである。落語用の字幕を作成した経験はなかったため、手探りではあったが、まず、さん喬師のCDの音源を基にして英語の字幕作りの作業を行い、ペーシになる原稿を作った。次に、師匠がリハーサルをしている時に、師匠の現行バージョンとのずれを調整していった。万全を期して、本番に臨んだ。私は客席前列の端で、パソコンを膝にのせて、師匠の話にそって字幕を進めていった。が、師匠は全く同じ言葉を同じ順序で話すわけではなかった。

語家が時々まくらで「落語を楽しんでもらうのには皆さんのイメージが必要ですよ」と言うことがあるのは、こういう理由であると思う。そして、落語家の技量は客をいかに上手にイメージの世界に連れて行けるかである。さん喬師はその名人である。

▼古典落語

小咄を選ぶ時に学生は「この話は面白い」とか「このジョークはさむい」と言ってくる。そんな時、私は本当は誰がやるかによってどんな話でも面白くなるかと答える。

古典落語を聞く人はその話が最後にどうなるかを知っている。「時そば」を聞く時二人目の男が損をすることも知っている。では、どうして何度も聞きたくないのであるか。それは、忠臣蔵を好きな人が毎年十二月になると討ち入りを見たくなるのと同じである。水戸黄門でいつ印籠が出てくるかを待っているのと同じ気持ちである。ロミオとジュリエットを見て涙を流すのも同じである。それぞれの話を持っている世界の中で遊ばせて欲しくなり、その中の名シーンが出て来るのを楽しみにしているのである。古典落語を聞く時に、驚きの要素はない。馴染みのレストランのビーフシチューがたまに食べたくなるのと同じである。

小咄の練習を始めると、学生たちは同じ小咄をプロがやる

中央大学政策文化総合研究所

研究叢書

オーラル・ヒストリー
多摩ニュータウン

細野助博・中庭光彦編著

4305円

地球社会の変容と
ガバナンス

内田孟男編著

4305円

中国における企業と市場の
ダイナミクス

丹沢安治編著

2520円

日中関係史の諸問題

斎藤道彦編著

3255円

グローバルガバナンスと
国連の将来

横田洋三・宮野洋一編著

4200円

戦間期の東アジア国際政治

服部龍二・土田哲夫・後藤春美編著

7665円

この注文は、中央大学出版部へ

TEL 042(674)2351 FAX 042(674)2354 http://www2.chuo-u.ac.jp/up/ ●価格は税込です。

さん喬 「先生、リハーサルと順番違っていましたね。困っているの見えましたもの」

私 「はい、間違っていました」

さん喬 「間違っているわけではありません。私は落語を語っているのです」

まず驚いたのは、あれだけの熱演をしながら、私が困っているのが見えているということだった。私は落語家が話しているのは、歌を歌っているようなイメージを抱いていたが、それは根本的に間違っていた。「落語を語っている」場合、一つの話の中に含まれている場面を順番に描いていく、その場面を飛ばすことや順序が入れ替わることはまずない。しかし、場面内で言う台詞やその細かい順序は実はけっこう演じる度に微妙に変わっている。落語は一人芝居であるから、台詞が変わっても、それに対応するのは簡単である。だから、ライブの落語に正確な字幕をつけることはもともと無理な話だったのである。さん喬師は「満足にできた落語は一年で数えるほどしかない」と言う。それは、師が「落語を語っている」からなのだということがよくわかった。とても、字幕作りはとても面白い経験であった。最近、順序が入れ替わってもあわてないような字幕作りを心がけている。

▼日本の笑いがわかる？

日本人に「外国人に落語を聞かせている」とか「留学生に小咄をさせている」という話をする、必ずと言っていいほど「外国人に日本の笑いがわかるの？」という質問を受ける。私の答えは「もちろん、わかりますよ」である。もちろん内容を理解するための言葉の力や背景情報を持っていなければわからないが、根本的に日本人にしかわからない笑いなどというものは存在しない。いい間は日本人にとっても、外国人にとってもいい間である。そして、それは誰でも感じられることなのである。「日本人にしかわからないなになに」という考え方は是非ともやめていただきたいと思う。

(バデュー大学教授／ミドルベリー大学日本語学校校長)

